

「目を覚ましていなさい」

2022年05月25日

「気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたは知らないからである。それはちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに責任を与えてそれぞれに仕事を託し、門番には目を覚ましているようにと、言いつけるようなものである。だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴く頃か、明け方か、あなたがたには分からないからである。」（マルコ福音書13章33節～35節）

主イエスは終末時の出来事について語られた。未曾有の苦難の後、太陽は暗く、月は光を失い、星は天から落ちる。天は揺り動かされ、天の諸力が支配する時代は終わり、新しい時代が到来する。その時、人の子が大いなる力と栄光に満ちて、天の雲に乗って来る。そして、天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、選ばれた者を四方から呼び集められる。黙示文学的な表現で、世の終わりの完全な救いに与る様子を語っている。初代教会の人々は、この終末の救いを望んで、信仰を励まし合って生きていた。終末の待望は初代教会の篤い信仰であった。

この喜ばしい終末を待つ心構えを書いている。「いちじくの枝が柔らかくなり、葉が出てくると、夏の近いことが分かる。それと同じように、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。」いちじくの枝が柔らかくなり、葉が出て来たら、誰にでも、自然の法則だから、夏が近づいていることは分かる。同じように、これらの未曾有の苦難が次々に起こるのを見たら、主イエスの再臨が近いことを悟りなさいと言われた。主イエスが特に重要なことを語る場合「よく言っておく（アーメン レゴ）」と言われる。この言葉を用いてから、「これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない」と宣言された。終末時、神が支配する新しい時代、全き「神の国」の時代が到来する。この約束は決して変わることはない。地上の全ては移ろい行く。しかし、神の言葉である主イエスの言葉は変わることなく、実現される。教会は、この信仰に立ち、終末を待望して、福音宣教を励んできた。その終末日、「その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである」と世の終わりの時は、天使も神の子イエスも知らず、神だけがご存じであると言われた。終末の日時は神が決められる専権事項である。

終末信仰について、高齢の婦人から興味深い話を聞いたことがある。ホーリネス教会は終末信仰を強調していた。また、映画や演劇を観ることは罪であると教えていた。彼女は観たい映画が上映されているのを知り、何としても観たいと、隠れて映画館に入った。しかし、映画を観ている最中に、終末が来て、裁かれたらどうなるかと思うと気が気でなかったと、大笑いして言われた。終末信仰は、そういうことではない。マルチン・ルターは「明日、天地が滅びようとも、庭にりんごの木を植える」と語った。終末信仰は、終わりの時を望んで、今の時を責任的に生きることである。マルコ福音書は「気をつけて、目を覚ましていなさい」と忠告する。譬えをもって、主人は僕たちに責任ある仕事を託して、旅に出かけた。主人の帰りは何時かは分からない。眠っている時、突然、帰って来るかも知れないから、目を覚ましていなさいと諭している。もちろん、起き続けていなさいという意味ではない。主イエスの再臨を望んで、与えられた責任ある仕事を誠実にやり抜くようにとの警告である。終末信仰は、今を生きることを教える信仰である。